

第 2 章

子どものしつけ・教育観

木村 敬子



1. 子育ての場面

母親と子どもの会話や行動によるコミュニケーションの状況に大きい変化はないが、子育て場面で母親が心に思うことを探ると、「子どもが成長したと感じる」が減少し、「子どもの様子を見ていて、つい不安になることがある」が増えるなどの変化がみられた。

子育てのさまざまな場面を16項目用意し、それぞれについて「よくある」から「ぜんぜんない」までの4つの選択肢から選んでもらった。項目は子どもと話をする場面（会話によるコミュニケーション）、子どもと一緒にあるいは親の役割として行動する場面（行動によるコミュニケーション）、そして子育て場面において母親として抱く意識の3種類に分けられる。図2-1は場面ごとに「よくある」の多い順に並べたものである。

会話によるコミュニケーション

「子どもに一日のできごとを聞く」「子どもと『友だちや先生について』話をする」場面が「よくある」と答えた母親は半数を超え、「時々ある」を加えると9割以上になる。学校から帰ってきた子どもにおやつを食べさせながら、あるいは夕食時や食後の団らんのときにこのような話をする場面は、親子の大切なコミュニケーションの機会である。これらに次ぐのは「子どもと『成績や勉強について』話をする」であった。「子どもと『将来や進路について』話をする」場面は「よくある」が22.2%と少なくなる。

【会話には学年差と性差がある】

これらの会話場面には子どもの学年による違いが大きい。図2-2の通り、「子どもに一日のできごとを聞く」「子どもと『友だちや先生について』話をする」のは低学年ほど多く、中学生になるとぐっと少なくなる。反対に「子どもと『成績や勉強について』話をする」「子どもと『将来や進路について』話

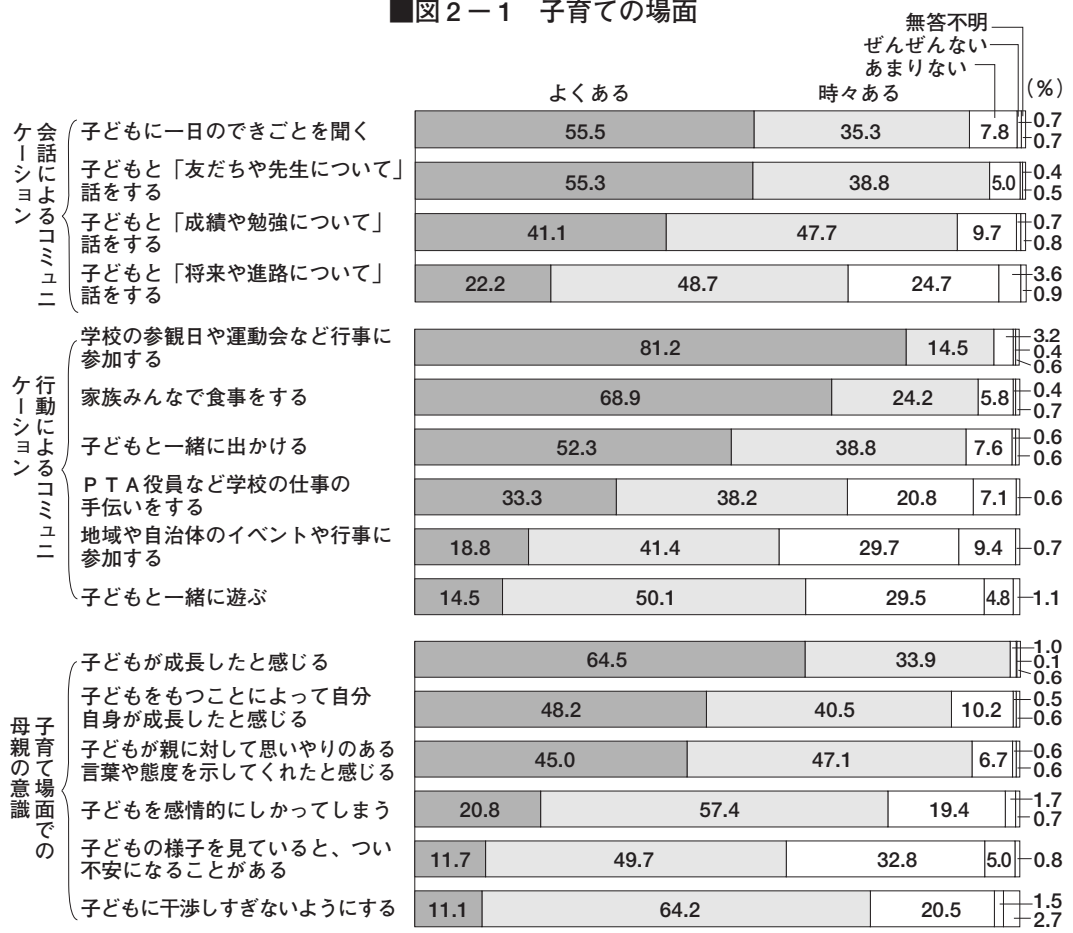
をする」はほぼ学年上昇とともに増えていき、中3生になると勉強や成績、進路などの話題が家庭での話題の大きい部分を占めるようになっていく。

男女の違いに注目してみると、「子どもと『友だちや先生について』話をする」のは小・中学生ともに子どもが女子である場合に多い。話すことが「よくある」のは、小学生男子55.5%に対して女子63.5%、中学生でも男子41.4%に対して女子58.2%である。「子どもに一日のできごとを聞く」については、小学生では性差がないが、中学生になると女子の母親のほうが「よくある」と答えている（男子39.7%、女子47.8%）。母親は中学生男子にその日にあったことを聞くことは少なくなる様子が示されている。しかし成績や勉強、そして将来や進路については男女差なく話している。これは親にとって話す必要度が高い内容であることを意味するのだろうか。

【会話の多さと関連する要因】

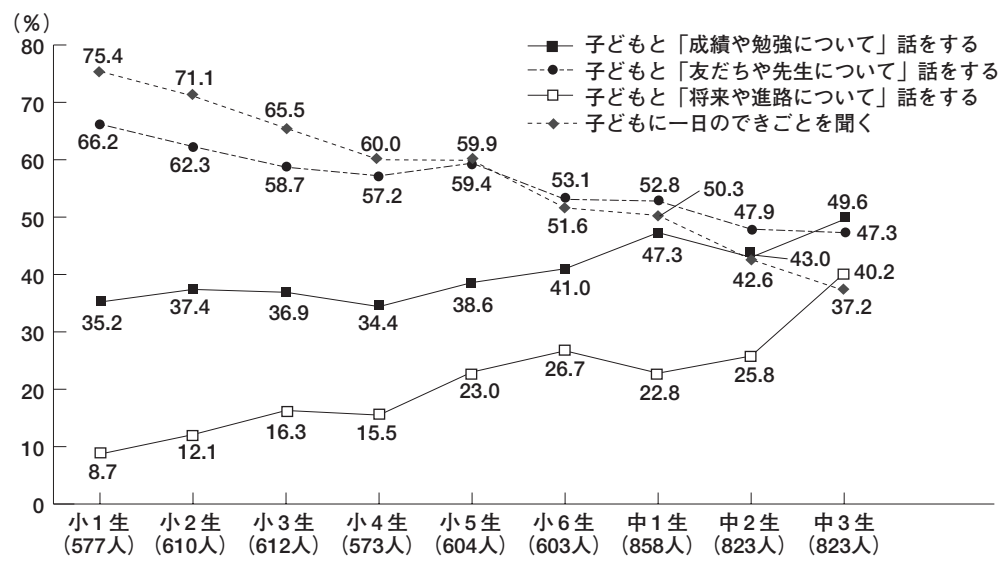
会話によるコミュニケーションの状況は、塾・習い事や学校のクラブ活動・部活動をしていることと関係があるだろうか。家にいる時間がそれだけ短くなって母親と話す機会が少なくなると思われがちである。しかし調べてみると、そうではなかった。たとえば、小学生の場合、塾・習い事の数が1つの場合に「子どもと『友だちや先生について』話をする」ことが「よくある」のは56.2%、2つの場合は61.7%、3つは65.0%となる。むしろ塾・習い事の数が多ければ、母親と話をしていくことが分かった。中学生も同じ傾向であった。

■図2-1 子育ての場面



注) サンプル数は6085人。

■図2-2 子育ての場面・会話に関する項目 (学年別)



注) 数値は「よくある」割合。

また、休日に「学校でクラブ活動や部活動をする」子どもは全体の22.1%（小学生6.0%、中学生では45.1%）いるが、この子どもたちとクラブ・部活動をしていない子どもの会話によるコミュニケーションを比較すると、差がないことが分かった。さらに、休日の過ごし方との関連をみると、「テレビゲームで遊ぶ」子ども、「マンガや雑誌を読む」子どもの場合に母親との会話によるコミュニケーションが少ないことが示されている。家にいる時間の長さが問題なのではないことが分かる。

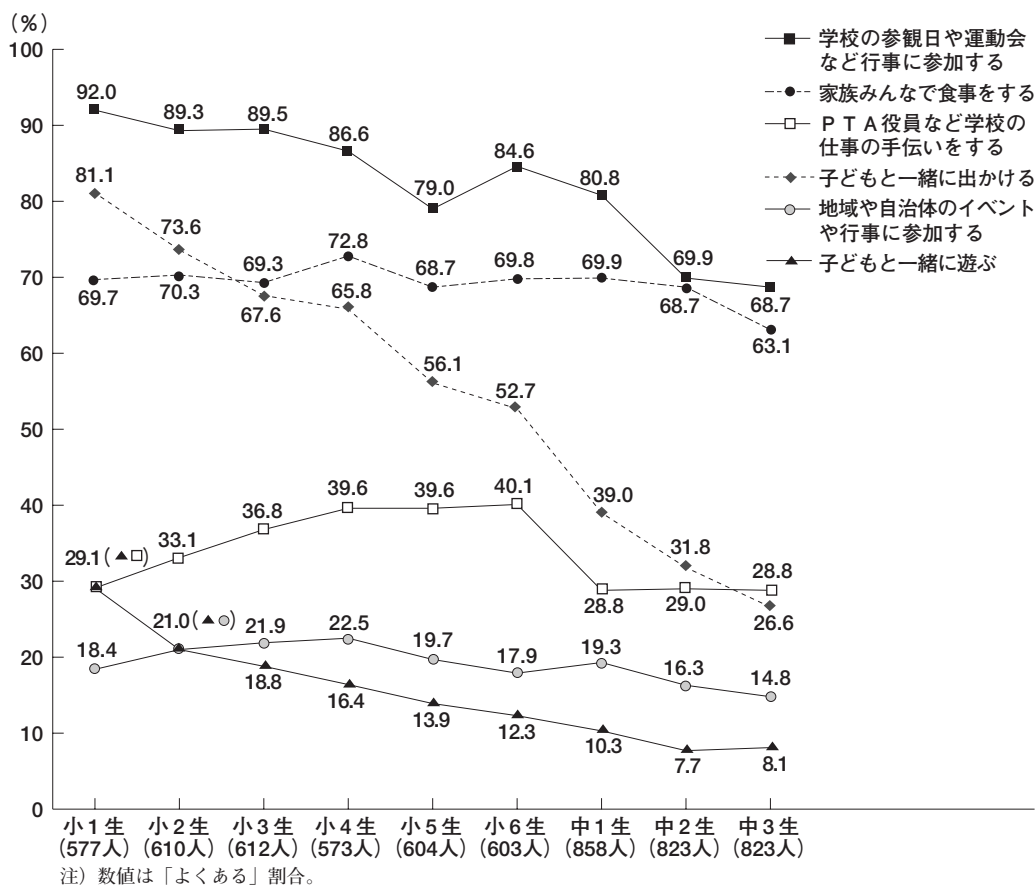
会話によるコミュニケーションの状況について1998年調査と比べると、一定の傾向をも

つ変化はみられない。

行動によるコミュニケーション

行動の場面にはまず、保護者として学校の行事に参加したり、PTA役員など学校の仕事の手伝いをするなどの学校関連の行動がある。子どもが在学しているからこそ必要な行動で、親としての自覚が高まる場面でもある。最も多かったのは「学校の参観日や運動会など行事に参加する」ことで81.2%が「よくある」としている。小1生から小3生までは9割近くが「よくある」としているが、中2生、中3生になると7割程度まで少なくなる（図

■ 図 2-3 子育ての場面・行動に関する項目（学年別）



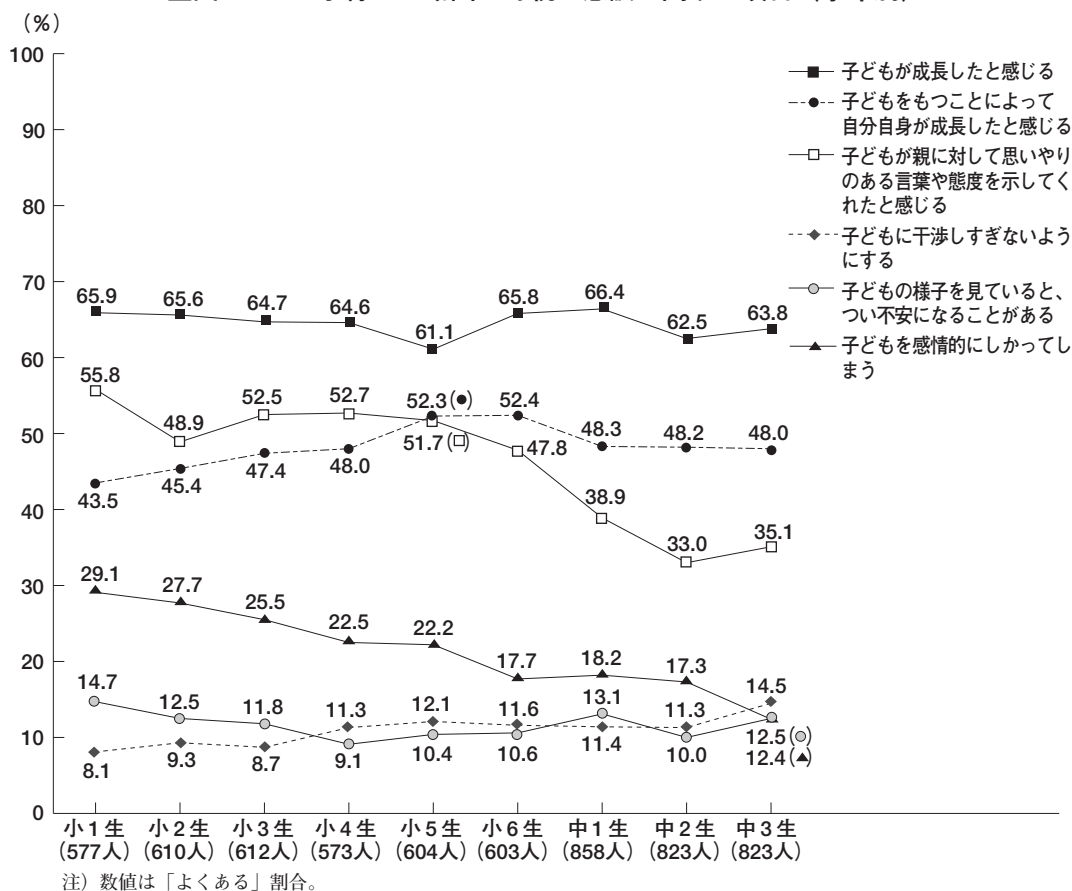
2-3)。「PTA役員など学校の仕事の手伝いをする」は、小学校高学年で高かった。

家族としての行動では、「家族みんなで食事をする」「子どもと一緒に出かける」「子どもと一緒に遊ぶ」などについてたずねた。「家族みんなで食事をする」に注目してみよう。近年、夕食を1人で食べる子ども、家族がいても自室で食べる子どもが問題とされたことがある。今回の結果では68.9%が「家族みんなで食事をする」ことが「よくある」と答えている。中3生にやや少ないが、学年差に一定の傾向はない。経年変化もなかった。

子育て場面で感じること

図2-1の最下段は子育てのさまざまな場面で母親が感じることである。学年別グラフを図2-4に示してある。「子どもが成長したと感じる」「子どもをもつことによって自分自身が成長したと感じる」「子どもが親に対して思いやりのある言葉や態度を示してくれたと感じる」は、子育てについて満足感や肯定的な感情をもつことにつながる内容である。「時々ある」を加えると9割の母親がこのような感じをもつことがあると答えている。

■図2-4 子育ての場面・母親の意識に関する項目(学年別)



【子育て場面での満足感にかげり】

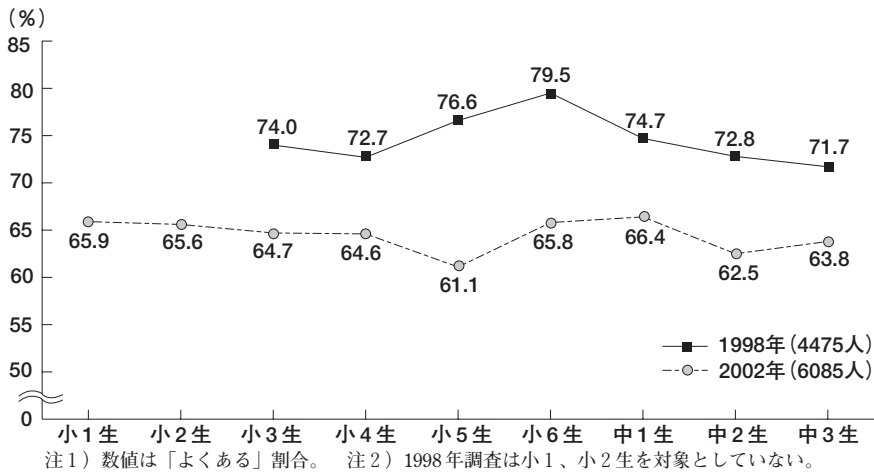
しかし、経年変化がみられた。図2-5にあるように「子どもが成長したと感じる」がどの学年でも1998年調査より減少しており、「子どもをもつことによって自分自身が成長したと感じる」も減少傾向がみられる。そして「子どもの様子を見ていて、つい不安になることがある」については小4生、中1生以外は、小差ではあるが1998年調査より「よくある」が多い。どうやら子育てについての満足度にかげりが出ているようである。これらの項目は「毎日の子育ては楽しいですか」という質問への回答と関係がある。すなわち、「子どもが成長した」「自分が成長した」と感じ、子どもの様子に不安を抱かない母親は子育てを楽しんでいる。それだけに、これらの経年変化には注目する必要がある。

これらの項目と、子どもの性別、成績、母親の就業状況などとの関連をみた。「子ども

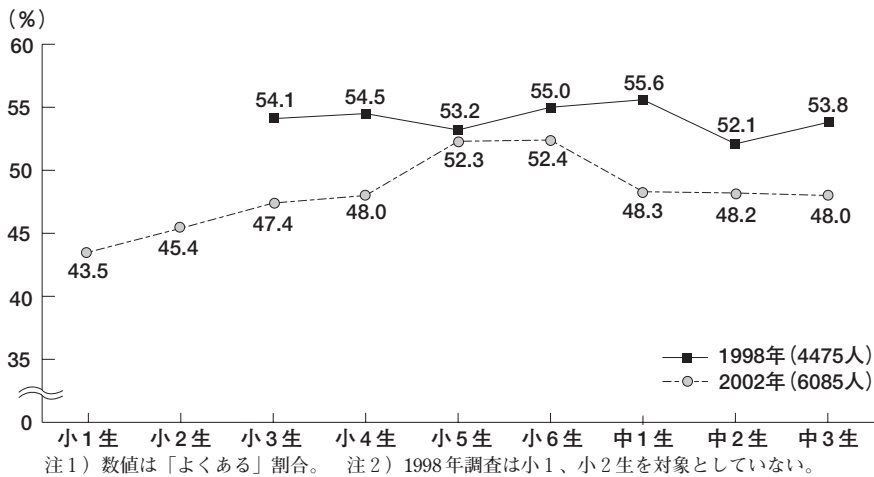
が成長したと感じる」については男子より女子の母親のほうが、そして学校での成績が「上のほう」と答えた母親が「下のほう」と答えた母親より、「成長した」と感じている。「子どもをもつことによって自分自身が成長したと感じる」については、小学校高学年の母親が、そして学校での成績が「上のほう」の母親が、「常勤」の母親が「専業主婦」の母親よりも、「成長した」と感じている。「子どもの様子を見ていて、つい不安になることがある」については、子どもが「第1子」であるほうが「第2子」以降よりも、学校での成績が「下のほう」の母親が「上のほう」の母親よりも、「専業主婦」が「常勤」よりも、つい不安になることがあると答えている、という結果が出た。いずれの項目においても子どもの学校での成績が上位であるほど、子育て場面での満足感が高く、不安感が低い、という結果となっている。

■図2-5 子育ての場面・経年比較(学年別)

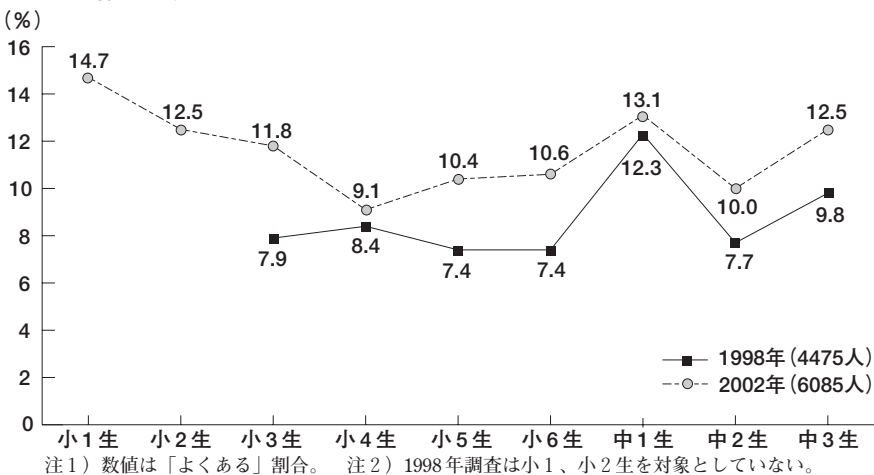
① 子どもが成長したと感じる



② 子どもをもつことによって自分自身が成長したと感じる



③ 子どもの様子を見てみると、つい不安になることがある



2. 子育てで心がけていること

あいさつやお礼がきちんとできることや友だちづきあいを大切にするような、人間関係重視のしつけを心がけている家庭が多い。学年段階により移り変わるしつけがある一方、出生順位、母親の就業状況などによる違いも見いだされている。

図2-6は、子育てで心がけていることについて「とても心がけている」の割合が多い順になっている。今回追加した新しい項目が3つある。上から3番目の「自分でできることは自分でさせるようにしつけている」、6番目の「食事の態度やマナーを教えている」および8番目の「多少いやなことがあっても我慢するようにしつけている」の3項目である。

人間関係の重視

1998年調査から継続の項目間の順位にはまったく変化がなかった。「あいさつやお礼ができるようにしつけている」については「とても心がけている」と「まあ心がけている」を合わせると96.1%となり、最も母親が心がけているという結果であった。第2位が「友だちづきあいは大切にするように教えている」であることを合わせて考えると、子どもたちが礼儀を守り、周囲との関係を良好に保ち、社会で上手に生きていけることを、母親は何よりも望んでいることが伝わってくる。その傾向はこの4年間、変化せずに続いていることがわかった。少子・核家族に育ち、他者とのつきあいが苦手な子どもが多いといわれ、人間関係への関心が高いことがここにもあらわれている。子育てで最も気がかりなことを1つあげてもらった質問では第1位の「子どもの進路」とほとんど同率で第2位に「友

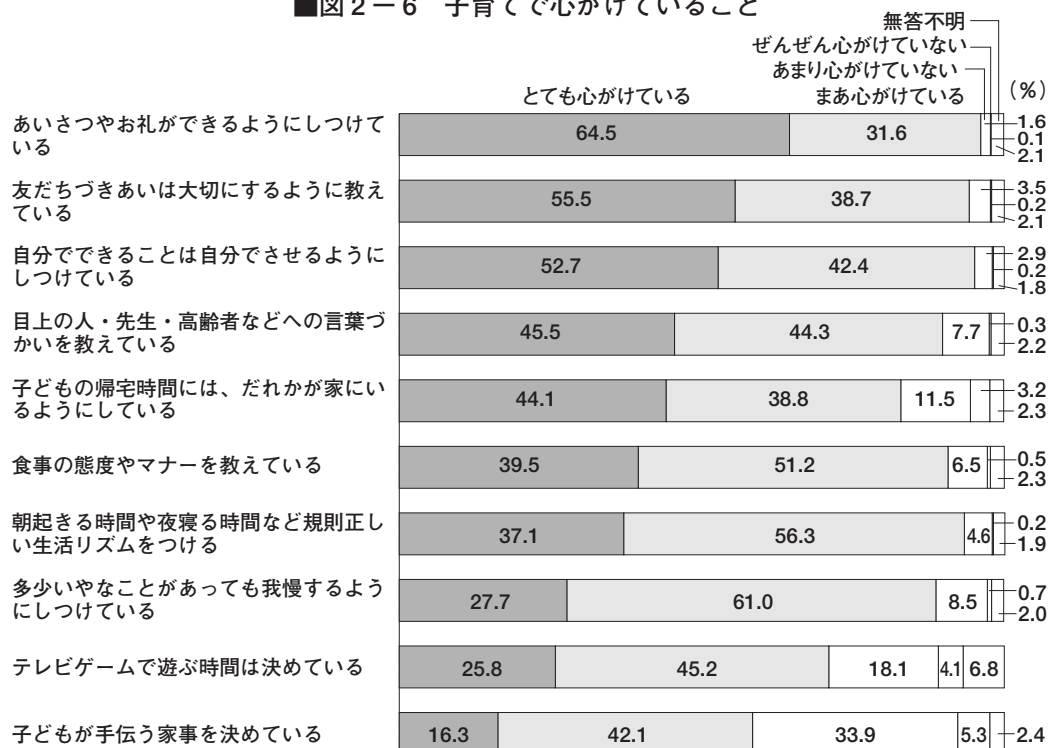
だちとのかかわり方」があがっている（p.20参照）が、そのこととも同様の傾向といえよう。

自立のしつけも大切

ところが「とても心がけている」の割合が多い3番目に、新しい項目が入ってきた。それは「自分でできることは自分でさせるようにしつけている」である。「まあ心がけている」を加えると95.1%になり、第2位に浮上する。これについては学年差に関する一定の傾向はみられない（図2-7）。子どものそれぞれの年齢段階で自分でできることは自分でさせようとしていることがこの図には示されている。

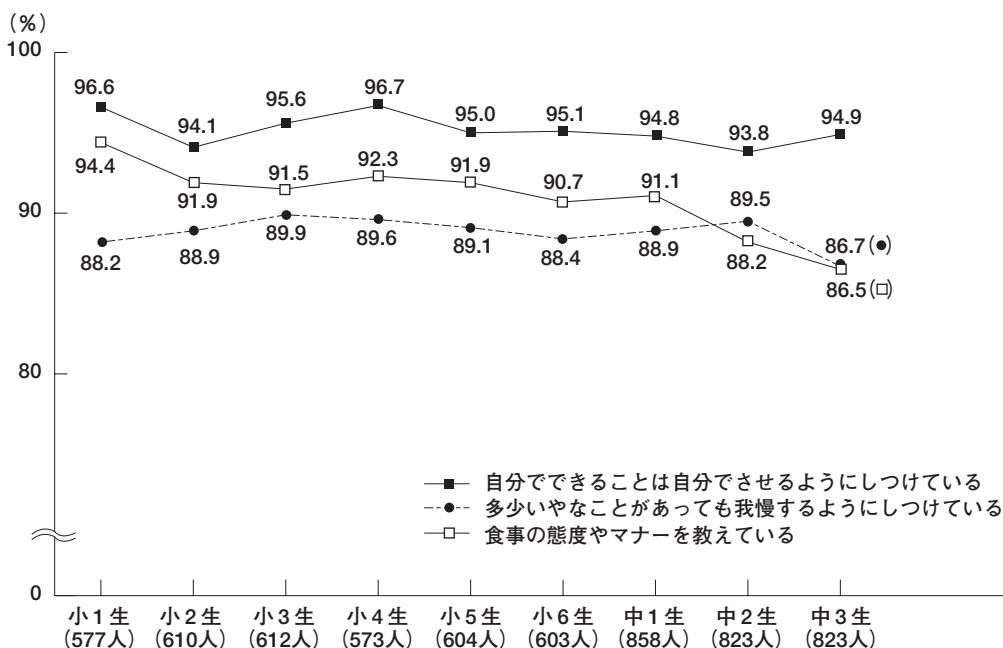
新項目「食事の態度やマナーを教えている」と「多少いやなことがあっても我慢するようにしつけている」は、「とても心がけている」という回答はさほど多くないが、「まあ心がけている」を合わせると上位に位置づいてくる。両項目ともしつけの内容としては欠かせないものとなっていることが分かった。食事の態度やマナーのしつけは小1生で最も高く、中2生、中3生では低くなる。“我慢”のしつけについては学年差は小さい。また、子どもの性別、母親の年齢との関連も、ほとんどなかった。

■図2-6 子育てで心がけていること



注) サンプル数は6085人。

■図2-7 子育てで心がけていること(学年別)



注) 数値は「とても心がけている」と「まあ心がけている」の合計。

第1子へ手厚いしつけ

子育てで心がけていることは、子どもが「第1子」と「第2子」以降で何か違いがあるだろうか。「第1子」と「第2子」以降の割合は学年によってやや違いがあり、「第2子」以降が低学年に少なく中学生に多い。項目中には学年差の大きいものがあるので偏りが出るおそれがある。そこでここでは今回の対象者中の中間の学年、小4生、小5生、小6生の3学年計1780人（うち1人は出生順位が無答不明のため除外）にしぼってその違いをみてみることにする。この3学年については「第1子」と「第2子」以降の分布に差はない。

クロス集計の結果5つの項目で違いがみられた（図2-8）。「食事の態度やマナーを教えている」「朝起きる時間や夜寝る時間など規則正しい生活リズムをつける」といった、基本的なしつけはやはり「第1子」の母親でとくに心がけていることがわかる。また「子どもの帰宅時間には、だれかが家にいるようにしている」が「第1子」に多いこともうなずける結果である。家族形態別にみたところ、「第1子」については「核家族」においても「三世同居家族」においても、子どもの帰宅時にだれかがいるように気を配っていることが分かった。

「多少いやなことがあっても我慢するようにしつけている」「テレビゲームで遊ぶ時間は決めている」も、「第1子」の母親のほうが心がけている。

しつけに気を配る専業主婦

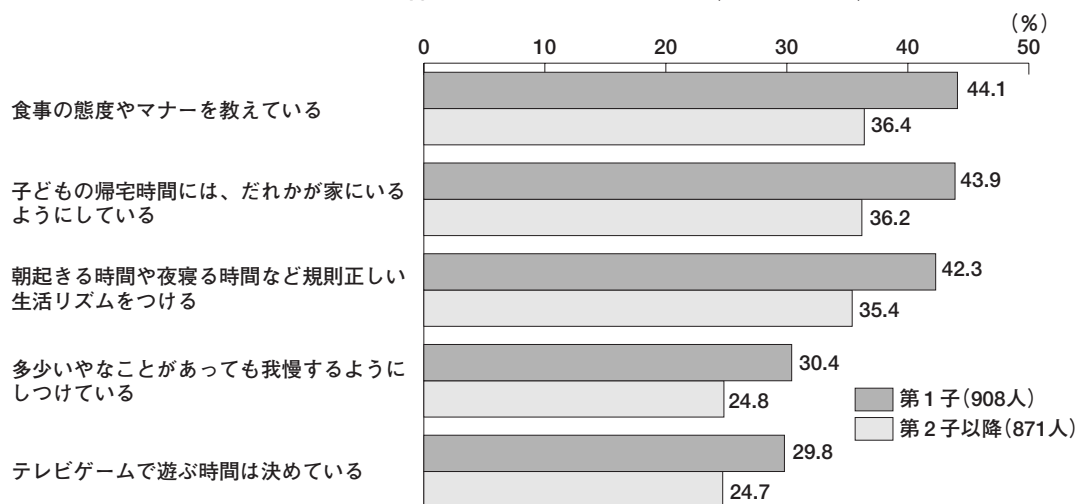
母親が仕事をもっているかどうかによって子育てで心がけていることが異なるのかについてみてみたい。「専業主婦」「パートやフリー」「常勤」の分布は子どもの学年によって異なる。子どもが大きくなると働き始める母親が多く、「専業主婦」の割合は少なくなっていく。そこで前項と同様に、小4生、小5

生、小6生の3学年（1780人中139人は就業状況が無答不明のため除外）についてみてみることにする。「専業主婦」の割合は小4生35.3%、小5生33.3%、小6生32.3%と、差は小さい。

ほとんどの項目で統計的に意味のある違いがみられた。ここでは「とても心がけている」の割合について図示した（図2-9）。上の4項目、すなわち「あいさつやお礼ができるようにしつけている」「子どもの帰宅時間には、だれかが家にいるようにしている」「テレビゲームで遊ぶ時間は決めている」「多少いやなことがあっても我慢するようにしつけている」については、「とても心がけている」の割合が「専業主婦」に最も多く、次いで「パートやフリー」、最後に「常勤」となっている。すなわち「専業主婦」はこれらのしつけを他の母親よりもより強く心がけているわけである。またその下の3項目、「友だちづきあいは大切にできるように教えている」「目上の人・先生・高齢者などへの言葉づかいを教えている」「朝起きる時間や夜寝る時間など規則正しい生活リズムをつける」は、「専業主婦」と「パートやフリー」とがほぼ同じで、「常勤」は最も少ない。これらに対し、「常勤」の母親が他の就業状況の母親より心がけているのは図の一番下にある「子どもが手伝う家事を決めている」であった。

このように「専業主婦」は子育てにおいて、家で子どもの帰りを迎えることやさまざまなしつけに心を砕くことが、働いている母親より強いということが明らかになった。子育てに力を入れるために「専業主婦」を選んでいる母親も多いと思われるので、この結果は不思議ではないといえるであろう。他方で「常勤」の母親の特徴は、子どもに家事の手伝いをさせたり、あまり干渉しないことによって、子どもの自立を促すことにつながる子育てをしているという点にあることが分かる。

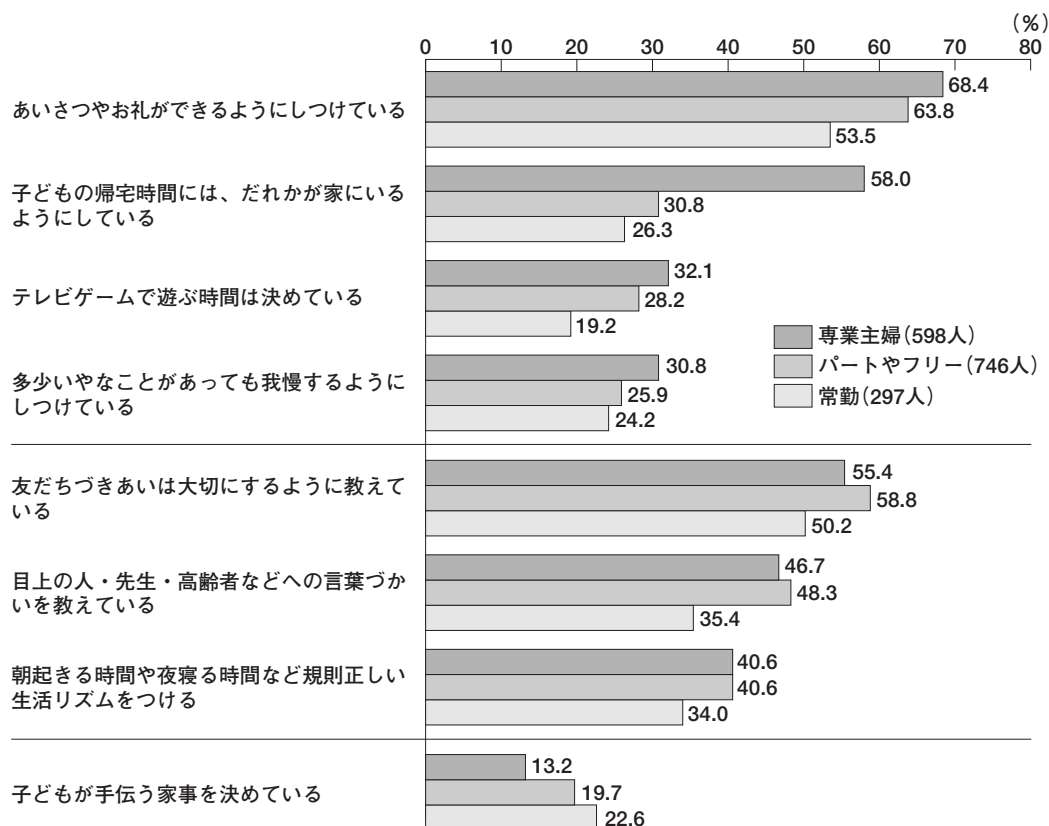
■図2-8 子育てで心がけていること(出生順位別)



注1) サンプルは、小4、小5、小6生の母親1779人(子どもの出生順位についての無答不明を除く)。

注2) 数値は「とても心がけている」割合。

■図2-9 子育てで心がけていること(就業状況別)



注1) サンプルは、小4、小5、小6生の母親1641人(就業状況についての無答不明を除く)。

注2) 数値は「とても心がけている」割合。

3. 家庭の教育方針

家庭でしつけを行うに際しての基本的な教育方針をたずねたところ、子どもの将来や教育についての不安感が増え、同時に子どもの教育にかかわろうとする姿勢が強まっていることが明らかになった。

家庭の教育方針について、小1生から中3生の結果を、「とてもあてはまる」の多い順に並べたのが図2-10である。前節で明らかになったように、しつけにおいて人間関係を重視する傾向がここにも示され、最も多かったのは「子どもがどういう友だちとつきあっているかを知るようにしている」である。以下、「子どものしつけや教育については夫婦で考えている」「教育に必要なお金はかけるようにしている」と続く。これは小3生以上が対象であった1998年調査とも同じ順位である。

この下の4項目では、「とてもあてはまる」が少なく、「まああてはまる」と合わせた肯定的回答と、「あまり+ぜんぜんあてはまらない」という否定的回答がおおよそ半々の分布となる。「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である」「子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている」というような、進学競争のなかにおかれた不安に積極的に対処しようとする方針を意識している家庭は約半数であることが分かった。しかし、これらについては経年変化がみられ、増加傾向にある(図2-13参照)。また、「親子で意見が違うとき、親の意見を優先させている」「子どもがすることを親が決めたり、手伝ったりすることがある」などの親主導の方針についても積極的に肯定する回答は少ないものの、経年変化があり、注目される。これについては後でもう一度とりあげる(p.50~51参照)。

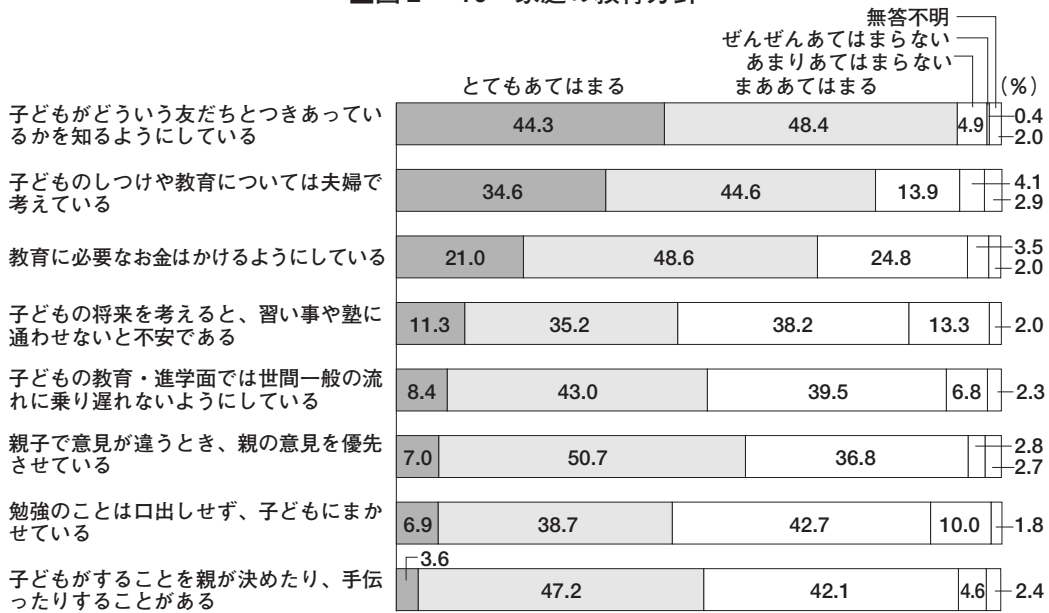
学年上昇で変化する教育方針

小1生から中3生までの学年別データを図2-11に示した。今回は小1、小2生が加わったので流れが一層よくみえるようになっている。上位2項目は学年による違いは小さいが、その他は学年上昇によって一定の変化がみられる。それらの項目に注目すると、まず「教育に必要なお金はかけるようにしている」が小1生、小2生が最も低く、学年上昇とともに増えていき中学生の母親で最も多くなる。同様な動きのある項目は「子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている」「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である」があげられる。高校受験が近づくにつれてこのような不安が増し、通塾率の上昇をもたらしていく様子が示される。同時に「勉強のことは口出しせず、子どもにまかせている」も学年上昇とともに増えていく。そこで勉強については塾にまかせることになるということであろうか。

逆に学年上昇につれて減少していくものは、「子どもがすることを親が決めたり、手伝ったりすることがある」、および「親子で意見が違うとき、親の意見を優先させている」である。

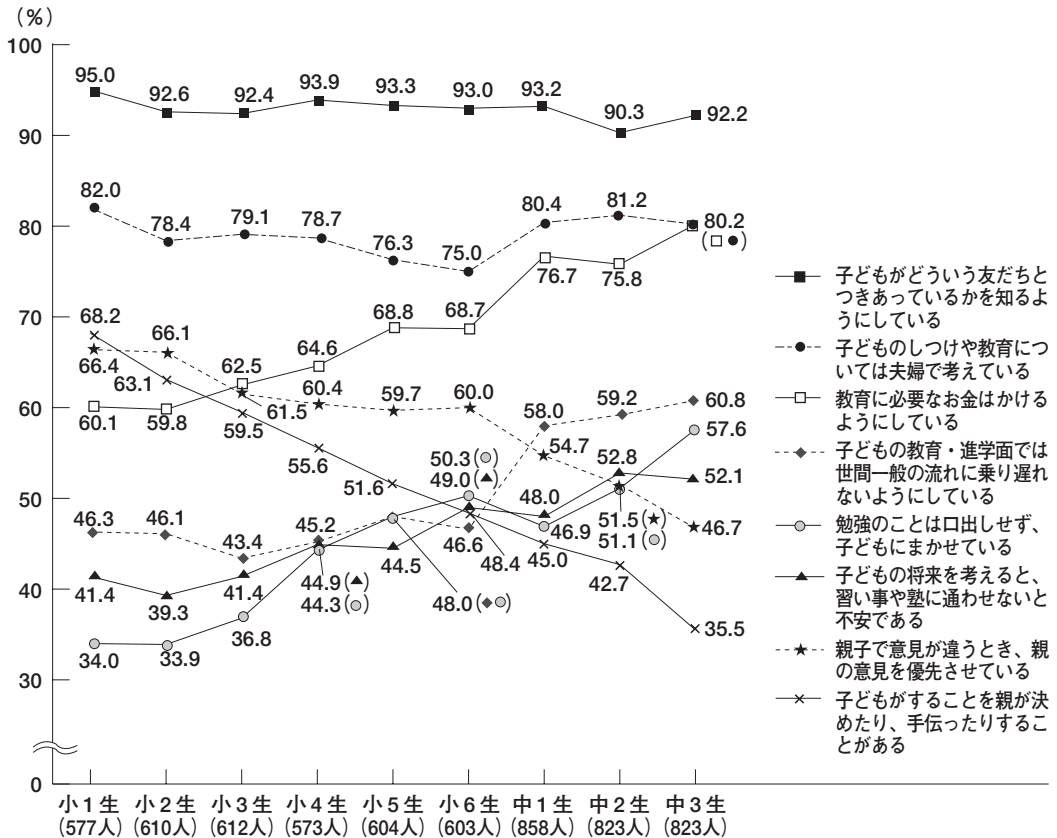
このような教育方針の学年上昇に伴う流れは、子どもの成長が母親の子育て生活にさまざまなニュアンスをもたらす様子を我々に伝えてくれる。それが母親の人間の成長を促す内実そのものなのではないだろうか。

■図2-10 家庭の教育方針



注) サンプル数は6085人。

■図2-11 家庭の教育方針(学年別)



注) 数値は「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計。

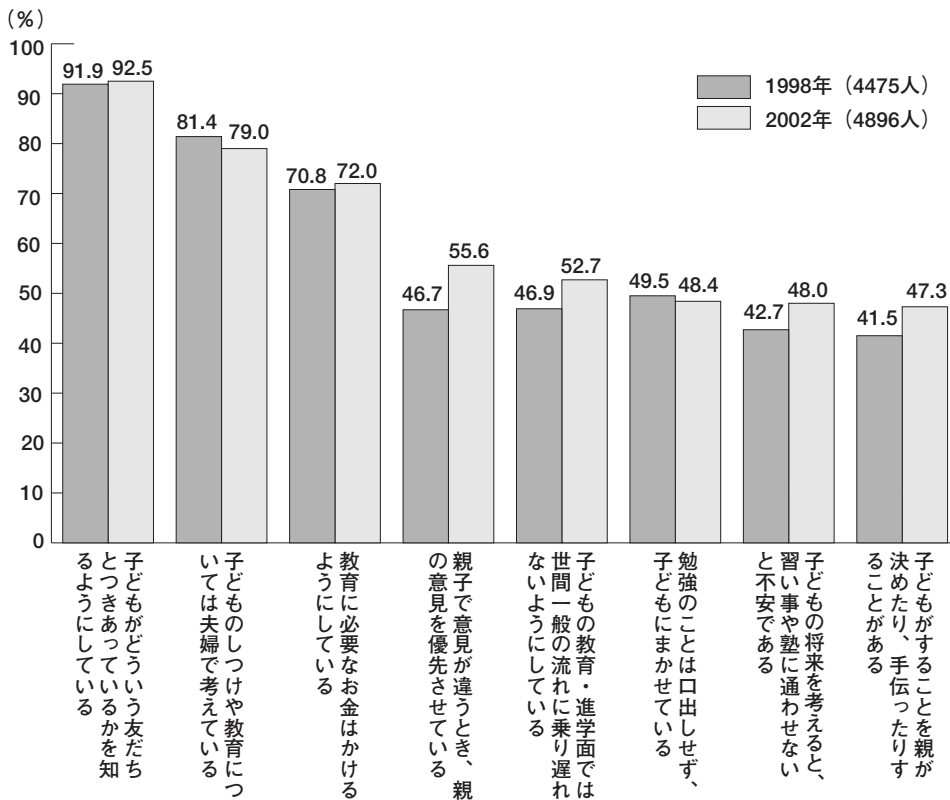
動いている教育方針

家庭の教育方針に経年変化はみられるのだろうか。1998年調査との違いに注目するために、小3生から中3生の母親について「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計を比較したものが図2-12である。上位3項目の順位は1998年調査と変わらなかった。しかし1998年調査では第4位にあった「勉強のことは口出しせず、子どもにまかせている」が第6位にさがり、代わりに「親子で意見が違ふとき、親の意見を優先させている」と「子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている」が第4、5

位にあがってきた。第7位「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である」と第8位「子どもがすることを親が決めたり、手伝ったりすることがある」は順位は変わらないが、今回のほうが肯定の回答が多くなっている。このように順位の変化をみても家庭の教育方針には動きがみられ、しかもそれは教育不安が増し、子どもの教育への関与が強まる方向への変化であることが示されている。

図2-13の4つの図は1学年刻みに「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の割合を記し、1998年調査と2002年調査を比

■ 図2-12 家庭の教育方針（経年比較）



注1) サンプルは小3～中3生の母親。

注2) 数値は「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計。

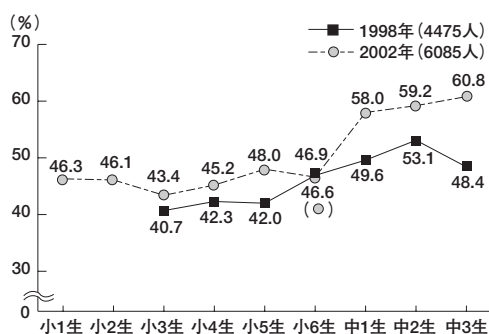
較したものである。「子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている」は中学生でとくに1998年調査より増えた。「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である」はどの学年でも1998年調査を上回ったが、中3生の母親で増加が目立っている。1998年調査と比べて、子どもの進学や教育について漠たる不安を抱く母親が多くなっていることがここからみえてくる。教育改革の大きなうねりのなかでマスメディアを通して伝わる情報も一段と多くなった。賛否両論のかまびすしい議論のなかで家庭での教育方針にも不安が色濃くなって

いる。

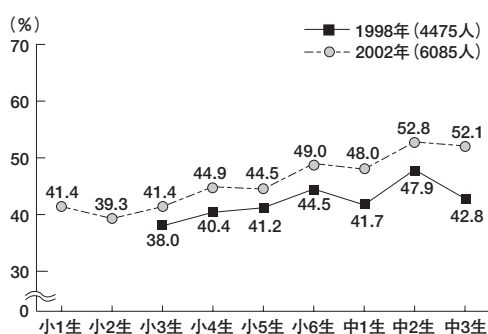
一方、「子どもがすることを親が決めたり、手伝ったりすることがある」も中3生を除くと全体に増加している。つまり、親の子どもへの関与が強まっていることがうかがえる。また「親子で意見が違うとき、親の意見を優先させている」も1998年調査より明らかに増えている。これら2項目の変化は上で述べた教育不安の反映とも考えられる。子どもにより強くかかわることで子どもの将来への不安を払拭したいという母親の意識がみえてくるような結果である。

■図2-13 家庭の教育方針（学年別経年比較）

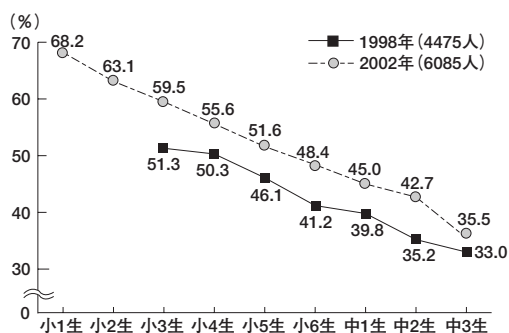
① 子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている



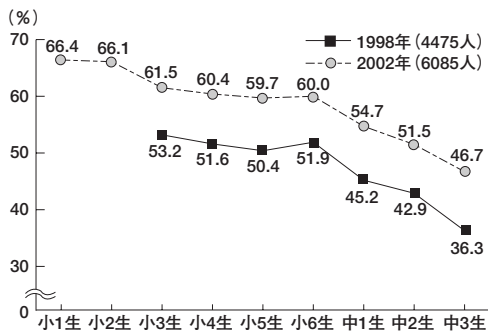
② 子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である



③ 子どもがすることを親が決めたり、手伝ったりすることがある



④ 親子で意見が違うとき、親の意見を優先させている



注1) 数値は「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計。

注2) 1998年調査は小1、小2生を対象としていない。

4. 休日の過ごし方

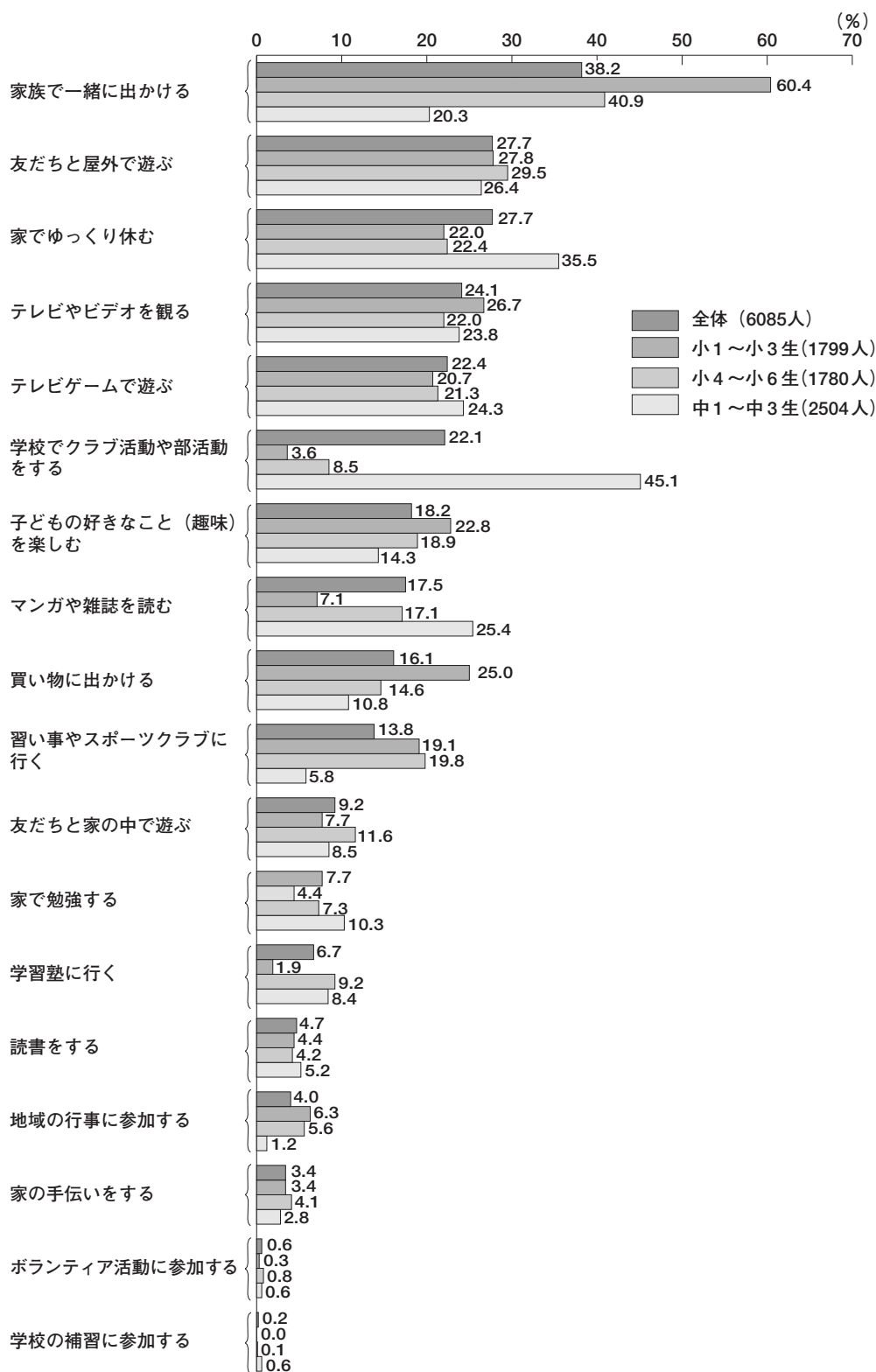
小学生は「家族と一緒に出かける」、中学生は「学校でクラブ活動や部活動をする」のが最も多い過ごし方であった。母親が望む健康的で充実した過ごし方と子どもの今の過ごし方には、ずれが見いだされる。

● **今、休日をどのように過ごしているか**
子どもが休日（土日や祝日）をどのように過ごしているかについて、「その他」を含む19の選択肢のなかから3つまで選んでもらった。3つ選択した者は全体の82.9%、2つ選択が7.1%、1つ選択が5.2%、無回答者（選択数0）が4.9%であった。図2-14は学年段階別および全体（合計）の、実際に過ごすことの多いものである。全体の選択率の多い順に上から並べてある。「家族と一緒に出かける」が第1位、次いで「友だちと屋外で遊

ぶ」と「家でゆっくり休む」が同率で続く。第4位「テレビやビデオを観る」、第5位「テレビゲームで遊ぶ」と上位5項目のうち、3項目が家の中ですることであった。

学年段階によって違いのある項目をみると、「家族と一緒に出かける」「買い物に出かける」「習い事やスポーツクラブに行く」のは小学生に、「家でゆっくり休む」「学校でクラブ活動や部活動をする」「マンガや雑誌を読む」のは中学生に多い過ごし方である。

■図2-14 子どもの休日の過ごし方(学年段階別)



注1) 19項目中3つまで選択。「その他」は図から省略した。

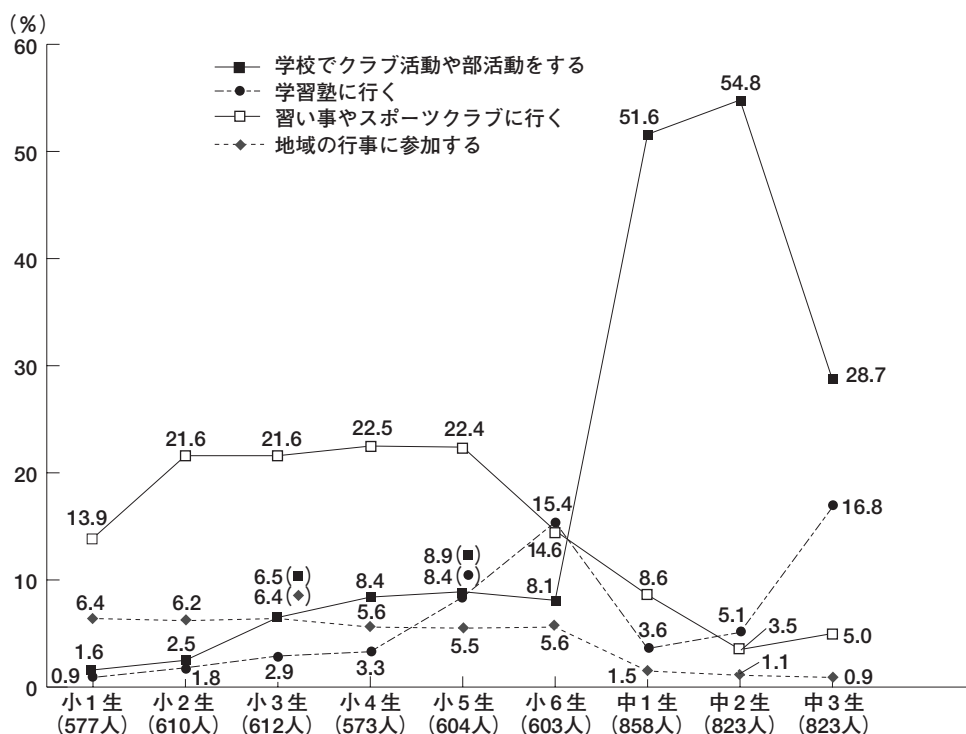
注2) 「全体」には学年不明の者を含む。

学校、塾そして地域に出かけて行く過ごし方に注目してみよう。図2-15をみると、学年の推移によって変化していく様子が示されている。小5生までは「習い事やスポーツクラブに行く」が多い。小5生から「学習塾に行く」が増え始め、小6生になると習い事と同じ程度になる。そして中学生になると、大きい変化がやってくる。中1生、中2生では「学校でクラブ活動や部活動をする」割合が急激に高くなり、学習塾や習い事が大きく減少する。そして中3生になると、「学校でクラブ活動や部活動をする」は減少し、「学習塾に行く」が再び多くなる。このように学習塾通いは、小6生と中3生という受験学年の子どもたちに比較的多い過ごし方となっている。

母親が望む過ごし方

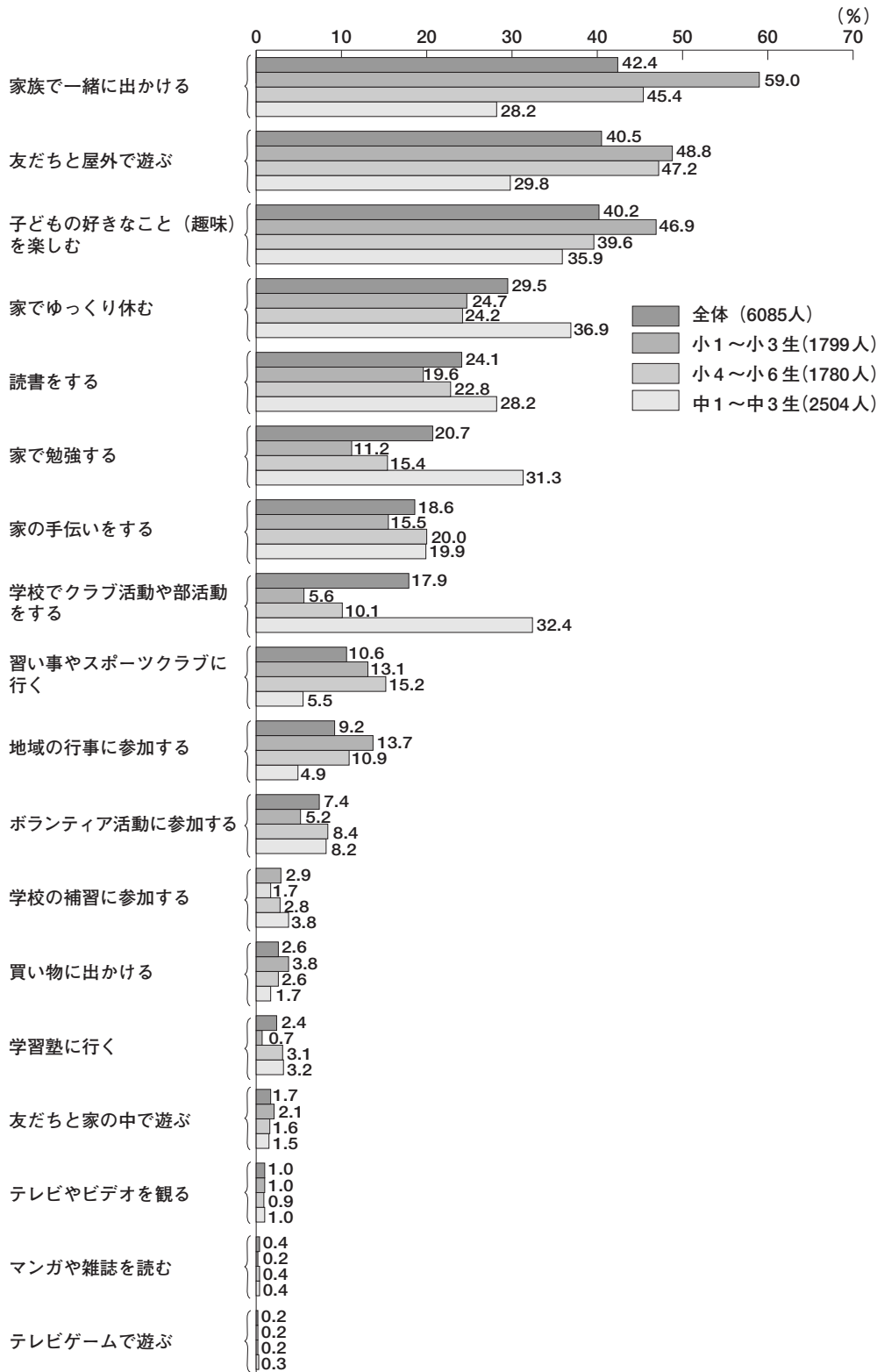
では、母親は子どもにどのような休日の過ごし方をしてほしいと思っているのかを図2-16でみる。希望の過ごし方を3つ選択、という指示であったが、3つ選択した者は86.3%、2つ選択5.9%、1つ選択3.8%、無回答者（選択数0）4.0%であった。「家族で一緒に出かける」「友だちと屋外で遊ぶ」が上位2項目に選ばれたのは、子どもの実際の過ごし方と同じであった。第3位に「子どもの好きなこと（趣味）を楽しむ」が入った。実際の過ごし方との大きな違いは「テレビやビデオを観る」と「テレビゲームで遊ぶ」「マンガや雑誌を読む」が少ないことである。このように子どもたちの実際の過ごし方と母親の希望とは、かなりずれている。

■図2-15 子どもの休日の過ごし方（学年別）



注) 19項目中3つまで選択。図は19項目のうち4項目を示した。

■図2-16 子どもに希望する休日の過ごし方(学年段階別)



注1) 19項目中3つまで選択。「その他」は図から省略した。

注2) 「全体」には学年不明の者を含む。

そこで図2-17に、実際の過ごし方と母親の希望がほぼ同じ項目、母親の希望が多い項目、実際の過ごし方のほうが多い項目に分けて、小学生・中学生別に示した。

【母親が望むのは屋外遊び—小学生】

小学生に母親が最も望むのは「家族で一緒に出かける」であるが、これは現状と一致し

ていた。現状と母親の希望の差が大きい項目に注目すると、小学生の現状を大きく超えて母親が望むのはまず、「友だちと屋外で遊ぶ」(48.0%)である。「子どもの好きなこと(趣味)を楽しむ」(43.2%)が続く。昔の子どものような外での群れ遊びが、子どもの心身の発達にとって必要と考えているようである。続いて、「読書をする」(21.2%)、「家の

■図2-17 子どもの休日の過ごし方(学校段階別)



注) 「子どもの休日の過ごし方」「母親が子どもに希望する休日の過ごし方」とともに、19項目中3つまで選択。「その他」は図から省略した。

手伝いをする」も17.7%あり、現状よりかなり多い。割合は少ないが、「地域の行事に参加する」(12.3%)、「ボランティア活動に参加する」(6.8%)も希望のほうが多い。母親は小学生には家族と一緒に過ごすことを望むと同時に、いわば有意義で、充実した休日の過ごし方をしてほしいと願っている。

【中学生には家で勉強、読書を望む母親】

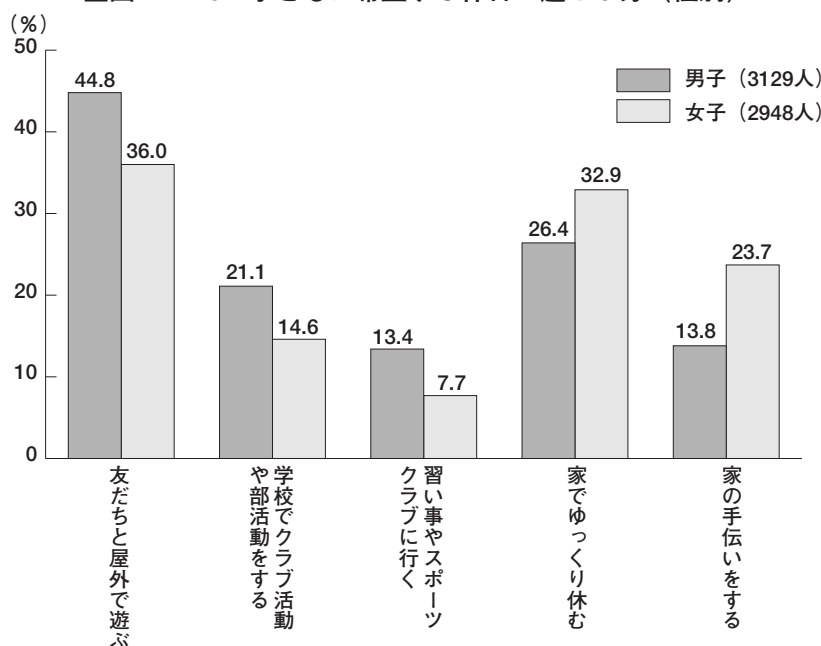
一方、中学生になると母親の希望も異なってくる。「家でゆっくり休む」が多いが、これは現状と一致しているので問題はない。現状より母親の希望が大幅に多い項目では、「子どもの好きなこと(趣味)を楽しむ」の次に「家で勉強する」「読書をする」「家の手伝いをする」があがってくる。「学校の補習に参加する」は3.8%にすぎないが、実際に補習を行っている学校が少ないにもかかわらず、もうこれだけ希望がみられるのは注目を要する。前節でこの4年間に、教育や子どもの将来への不安が強まっていることが見いだされた(p.48参照)。休日には趣味を楽しむ

のもいいが、中学生になったのだから勉強や読書をしてほしいという母親の希望には、そうした不安の影が見え隠れするようである。子どもの成績との関連をみると、家で勉強してほしいと望むのは子どもの成績が「下のほう」と答えた母親であり、読書を望むのは成績が「上のほう」と答えた母親である。進学期待(希望の最終学歴)との関連では、休日に子どもが読書をするのを望むのは高等教育を受けさせたいと思っている母親であった。

【母親が希望する過ごし方の男女差】

図2-18は母親が希望する過ごし方のうち、子どもの性別で違いがみられた項目である。男子には「友だちと屋外で遊ぶ」こと、「学校でクラブ活動や部活動をする」こと、「習い事やスポーツクラブに行く」ことを多く望んでいる。それに対して女子のほうに多く望んでいるのは、「家でゆっくり休む」と「家の手伝いをする」であった。現状を反映しているとはいえ、休日の過ごし方でも男女の違いが作られていく様子がうかがえる。

■図2-18 子どもに希望する休日の過ごし方(性別)



(注) 19項目中3つまで選択。図は19項目のうち5項目を示した。

